

# 南モンゴルにおける人口流動と家畜流動

## — シリングル盟の事例

尾 崎 孝 宏

### 1. はじめに

本論は、基本的には既発表の拙論「牧地の分割と定住化—南モンゴル，シリングル盟の事例」（尾崎 2000a）の続編として位置付けられる。本論のデータは、1999年9月末～10月初頭にかけてシリングル盟で行われた現地調査で得られたものであるが<sup>(1)</sup>，その調査目標および着目点は、前掲論文の根拠となるデータを収集した1999年3月の現地調査とその考察結果に立脚したものである。

簡潔に説明すると、現在、南モンゴルの牧畜地域に特徴的な景観として、有刺鉄線により囲い込まれた牧地が挙げられる。これは、中国が全国規模で行っている「生産責任制」の牧畜地域版として実行された、各経営体（一般的には世帯）に対する家畜・牧地分割への対応であると考えられるのだが、これと同時に並行的に、牧民の移動性の低下および住環境のゲルから固定家屋へのシフトも発生している。こうした一連の現象の実情について、1999年3月の現地調査で具体的な事例データを収集し、それに基づいて考察したのが前掲論文である。

そして、前掲論文で今後の課題として列挙したのが、サンプル数の増加および地方的バリエーションの確認、家畜の売却を通じた収入・流通の現状に対する調査、エスニシティの問題などであった。そのため、今回の調査は基本的にこの点を主たる着眼点として行われており、それは家畜売却期である秋季の調査であることや、シリント市アラシャンボラグ＝ソムや東スニト旗チャントシル＝ソムといった新たな調査地点に反映されている。なお、後述するように、エスニシティの問題についても若干のデータを得ることが結果として可能では

あった。しかし、この点を調査のテーマに据えることは「敏感な問題」であるがゆえに調査上の困難が予想されたため、意図的に調査テーマとしては取り上げなかった。そのため、本論でもこの点は考察の対象としていない。

一方、今回の現地調査の結果として認識を深めることとなった論点の一つが、本論のテーマとして挙げている人口と家畜の流動である。これは、牧地の囲い込みや定住化に伴ういわゆる「遊牧」、つまり移動的牧畜という伝統的生業を念頭に置いた上での移動性低下とは別の側面における移動を射程に入れた概念である。より本論の調査データに即して述べるなら、人の移住と家畜の越境放牧および地域外搬出ということになる。

また、これとは別に、今回の調査では牧地に関連して、現地のインフォーマントから牧地の荒廃に関するコメントが述べられたことが印象的であった<sup>(2)</sup>。これらの点については、1990年代前半～半ばにかけての現地調査に基づき、移動性の低下と草原の劣化の関連に言及したハンフリーとスニースの研究(Humphery & Sneath 1999)を参照しつつ、本論の考察部分で検討することにした。

#### ◆ 参考地図



- 1: チャントシル=ソム
- 2: バヤンボルド=ソム
- 3: デルゲルハン=ソム

- 4: ツアガンノール=ソム
- 5: シリンホト市
- 6: アラシャンボラグ=ソム

## 2. 調査データ

### A. 事例1

調査地点：西ウジュムチン旗ジャラン＝ソム，ザガスタイ＝ガチャ。1999年春の調査における事例3，J氏のホト（尾崎 2000a：56-59）

牧畜に関する追加情報：

1983年の牧地分配は，1人1800ムーだった<sup>(3)</sup>。父の世帯が4人，J氏の世帯が2人だったので，合計6人分，つまり， $1800 \times 6 = 10800$ ムーを分配された。現在に至るまで，父の土地とは区別せずに使用している。

1999年春からの家畜頭数の変遷は，600頭（調査当時）～900頭（出産後）～700頭（売却後）。なお，売却対象となるのは，主に仔ヒツジ（ホルガ），オス，老畜。なお，種オスも個人所有である。このホトには種ヒツジ13頭，種ヤギ2頭を擁する。

このホトの草刈場は，父のホトとの間にある丘の斜面。トラクターの後ろに草刈機を取りつけ，自分で刈り取るとのこと。調査当時，数列の草刈跡が見受けられた。なお，草刈に限らず水汲みもトラクターを利用し，移動は自家所有のバイクや自動車を用いるため，現地では今日，ウマで移動する者はいないという。J氏自身，隣のホトまでの移動手段としてバイクを利用していた。

このホトでの傭人の報酬は，毎月200元と仔ヒツジ一頭である。

ジャラン＝ソムには4つのガチャが存在する。ザガスタイ＝ガチャは人民公社時代の名残で現在なお「2隊」と漢語で言及されることが多い。これは，モンゴル語の会話の中でも，「アルトゥイ」と漢語のまま用いられている。なお，街道近くの「3隊（ドウルブルジン＝ガチャ）」には漢族の牧民も多く，「4隊」に至っては漢族ばかりであるとのことであった。漢族は，元々は農業を行いに来ていたそうだが，今では皆，牧民となっている。彼らは，J氏が物心ついた頃から，つまり文化大革命の前から住んでいるらしく，改革開放以降の新来ではない，とのことであった。

## B. 事例2

調査地点：シリントグ市アラシャンボラグ＝ソム，セルゲレン＝ガチャ（シリントグ市の中心部より北へ65km）

ホトの建物構成：固定家屋，ゲル×2，家畜囲い

ホトの世帯数：2

世帯1の構成：U氏（46歳），妻（42歳），娘（22歳），息子（19歳）

世帯2の構成：傭人，傭人の妻，傭人の子供3人

牧地の分配，住居：

1983年に家畜を分けた。ガチャから1人あたり何頭，という要領で分配され，U氏は世帯で100頭の小家畜（ヒツジ・ヤギ）をもらった。

1991年に牧地を分けた。土地も1人あた約2900ムーという分け方で，この世帯は14490ムーの土地を得た。土地は二塊に分かれており，冬営地はここから10kmほど南の山中。つまり，調査地点は春～秋の営地で，ここには南側に井戸がある<sup>(4)</sup>。冬営地にも石造りの家畜囲いがあり，11月から春節までを過ごす。水は雪から得る。ただし放牧は傭人が担当し，U氏は固定家屋から日帰りで放牧地まで通い，群れをチェックしているという。冬営地への家畜の移動は，3時間くらいで終わるらしい。牧民自身はウマで移動する。

1991年に現在住んでいる泥作りの固定家屋（幅10mくらい，3部屋）を建てた。それ以前は，ゲル住まいだった。現在，大きいほうのゲル（元々は居住用）<sup>(5)</sup>は客人用，小さいほうのゲル（元々はオトル用）は傭人の住居として利用されている。また，固定家屋の前にある家畜囲いも1991年に建てた。運転手のB氏によれば，こうした固定建築物を作るのは，主にシリントグ市街地居住の漢族。彼らは，シリントグでは仕事がないのだという。

家畜，放牧：

小家畜（ヒツジ・ヤギ）700頭，大家畜（ウシ）50頭。他にウマが少しいるが，「アハドゥー」（親しい友人）の世帯に預けてある。なお，この辺では，近くの場所であればウマで行くらしいが，現在，ウマを飼育する人は少なくなったという。また，筆者の観察では，U氏自身，馬群を追うのにバイクを使用し

ていた。

このソムでは、家畜700頭程度では「中程度」で、年収が3～4万元になる。最も多くの家畜を有するのはヤダムという人物で、2000頭だという。販売価格は、以前家畜の買付・運搬転売業を経験している運転手のB氏によれば<sup>(6)</sup>、ヒツジ（3歳）は300元くらい、ウシは1000元くらいであるという。また、本来、ヒツジの売却シーズンは秋であったのが、現在は何時でもヒツジを売る人がいるらしい。なおU氏によれば、家畜の頭数が多いために、この近辺には複数世帯が構成するホトアイルは存在しないとのことであった。

傭人（ホニチン）は、このホトへ来てから半年少々経つ。バーリンの出身。旧正月頃から雇っていて、1年契約で月300元の報酬を支払っている。彼らを雇う以前は、U氏達が自分で放牧していたが、U氏いわく、子供も全員出ているし、本人も体があまり調子よくないから仕方ない。彼らは、ゲルはおろか、家畜も持たずにやってきた。子供は、上は12歳くらいの女の子から3人いるが、学校には行かせていないという。

U氏によると、もし、餌を全て飼い葉（テジェール）にしたら年収5万元に達することが可能らしいが、牧地に生えている草（ベルチェール）では無理だという。

その他：

娘は今年、内蒙古師範大学を卒業したが、仕事がないので家にいる。ただし、調査時点ではシリンホトへ行っていて不在だった。息子は中等専門学校卒業後、シリンホトの自動車関係の学校で勉強しているため不在。

ホトの西南西1～2キロ向こうに、木が生えている場所がある。そこには人民公社時代、生産大隊の畑があって、かぶ（マンジン）を植えていたという。

U氏は、草地の後退を非常に気にしており、5年後はどうなるか分からない、と述べていた。固定家屋の北東200mくらいに有刺鉄線による囲い込まれた牧地があり、U氏の説明によれば2000ムーの広さで、草を守るために囲いこんでいるという。実際、囲いの中は周囲（10cm以下）に比べて、明らかに草丈が高かった（30cm弱）。また、U氏に見せてもらった1970年代の写真では、草が膝

丈まで生えており、当時は現在より草の状態が良かったことが伺える。対照的に、現在、夜間にヒツジやウシを休ませている場所には、ほとんど草生がない。

アラシャンボラグ＝ソムは、元々アバガ旗と旧西ホチト旗の土地よりなるが、調査地域は旧西ホチト旗に属していたという。ただし、U氏の家は元々アバガで、現在のジャルガラント＝ソムに居住していたが、1942年こちらへ来たという。U氏によれば、一口に南モンゴルといっても、文化的には大分バリエーションがあるという。例えば、茶の飲み方を取り上げて、東スニトでは、茶に塩を入れないが、西ウジュムチンでは入れる。なお、この家のも全く塩が入っていないが、これは主人の健康上の問題らしい。また、このホニチンは塩入りのハルツァイ（乳を入れず、単に轉茶を煮出したもの）を飲むらしい。大板（バーリン右翼旗の中心地）の漢族と全く同じ風習だという。

U氏は、元々のモンゴル人の食生活は朝・昼ともに茶で、夕方のみ食事（ホール）だったのだが、現在は風習が変わったという認識を示している。実際、このホトで調査を行った2日間とも、昼食に野菜炒めと白米を食べていた。野菜は、筆者の観察する限り、ソム中心地で購入可能。筆者の実見した露天商（トラックで商品を持ってくる）では、キャベツ、チンゲン菜、かぼちゃ、にんにく、ピーマン、なす、にんじん、ジャガイモ、りんご、ネギ、大根を売っていた。

### C. 事例3

調査地点：東スニト旗チャントシル＝ソム，ダルハンシレー＝ガチャ（シリントグ盟から西へ160km）

ホトの建物構成：固定家屋（レンガ1，泥1），家畜囲い（泥造りの居住スペース有り）

ホトの世帯数：2

世帯1の構成：H氏（31歳），妻，娘（9歳），妻の母，妻の弟

世帯2の構成：S氏（60代後半？）<sup>(7)</sup>

来歴，牧地の分配，住居：

S氏は漢族で、ウランチャブ盟集寧市の出身。30年前に現地へ移住してきた。S氏の妻は3キロ離れたソム中心地に住んでおり、S氏はソム中心地とこのホトを往復して生活している。牧地はS氏に対して、1991年に分配されたもの。面積は6200ムーで、固定家屋から北西方向に広がる一塊の土地である。牧地内部に私有の井戸がある。

H氏はもともとホルチンの出身で、入婿という形で結婚して10年くらい経つ。東スニト、つまりこのホトへ移住してきたのは1996年。それまでは妻の出身地であるチャハル正鑲白旗に住んでいた。ただし、日本の母子手帳に相当すると思われる書類を見る限り、娘の出生地は東ウジュムチン旗となっており、妻の母も東ウジュムチン旗には彼女の親戚が住んでいると語っていたので、複雑な移住過程を経ていることが想像される。なお、このホトへはS氏の傭人として来住した。

H氏が1996年に来住した際は、S氏は泥造りの家畜囲いに併設された居住スペース、H氏は泥造りの固定家屋（ゲルの形状をしている）に居住していた。1997年春にレンガ造りの固定家屋を建築。これは一棟であるが、内部は完全に二分されており、東側1/3程度がS氏の住居（1組44号）で内部は未見、西側2/3程度がH氏の住居（1組45号）で内部は台所を含めて5部屋を擁する。なお、新しい固定家屋の建築は、H氏のイニシアチブによる。

H氏によると、彼らはチャハルにも土地があったが、3年間不在にしていると土地を没収されるという規定があるため、現在はチャハルの土地は失っているという。なお、現在のホトの土地に関しては、H氏はS氏より「貰った」。その理由は「S氏には労働力がいなかったため」と語っていた。

H氏によると、このホトより西は漢族ばかりが住んでいる地域であるという。なお、景観上は西方も東方も同様な草原である。

家畜、放牧：

S氏の家畜は、彼のメモによると7月11日現在、ヒツジ147頭、ヤギ37頭。H氏の家畜は、本人談によれば小家畜150頭、大家畜30頭とのこと。そのほかに東スニト旗科学委員会の家畜を預託されており、その数は6月16日現在、ヒツ

ジ120頭、ヤギ143頭である（表を参照）。なお、H氏は来住時にチャハルで放牧していた家畜を連れてきたが、家畜小屋や囲いの必要な「新疆羊」（改良種）ばかりだったので、仔畜が生まれなかったという。また、現在は、ヤギのほうがヒツジより多い。放牧については、全ての群れを一緒にしてH氏が放牧している。放牧には、自転車やバイクを利用していた。

現在、家畜囲いは泥造りの部分と、その東側に接する石造りの増築部分よりなる。増築部分は1998年に造ったもので、こちらはH氏の囲い、以前よりある泥造りの囲いはS氏のものであるという。

特筆すべき点として、このホトでは、通常漢族の家畜と見なされているロバ1頭と鶏2羽も飼われていた。また、ヒツジの所有者表示のマーキングとしては旧来の耳印ではなく、青色のペンキが用いられていた。

調査日の翌日、H氏はヤギを売却予定であると語っていた。旗中心地で売却し、代わりに穀物（ボダー：恐らくは白米）を買ってくる、とのことである。その他：

H氏の妻の母によれば、彼らが以前住んでいたのは新しく集通鉄道が開通した沿線であるというが、その一帯は特に生活が困難である、とのことであった。彼女もチャハルの人であり、彼女はスニト人に対する感想として、「朝も昼も茶で、夜は麺類だけ食べる。あんな茶ばかりの生活、私達にはできないわ。ヒツジ700頭、ウシ100頭、ウマはおろかラクダも数頭持っているような人たちが、何であんな生活をしているんだか…」と語っていた。

なお、H氏の食生活は、搾乳を行い乳製品も作る一方、花巻、野菜炒め、卵焼きといった、華北一帯の漢族と共通する料理が数多く作られていた。なお、こうした食生活は、運転手のB氏によればシリンホト市など都市部に住むモンゴル族にも共通するものである、とのことであり、彼に言わせても牧民の食事は「ヤマル チ ノゴー バイフグイ（何もおかづがない）」という評価であった。



表A. S氏の家畜（1999年7月11日現在）

	ヒツジ	同2歳	同1歳	種オス	ヤギ	同2歳	同1歳	種オス
オス	3	5	25	3	6	0	4	1
メス	60	21	30	—	18	2	6	—
小計	63	26	55	3	24	2	10	1
合計	147				37			

表B. 東スニト旗科学委員会の家畜（1999年6月16日現在）

	ヒツジ	同2歳	同1歳	種オス	ヤギ	同2歳	同1歳	種オス
オス	0	14	18	0	16	15	17	0
メス	55	15	18	—	63	15	16	—
小計	55	29	36	0	79	30	34	0
合計	120				143			

## D. 事例4

調査地点：東スニト旗チャントシル＝ソム，バヤンノール＝ガチャ2組4号  
 （事例3のホトから南南東に4 km，境界は隣接している）

ホトの建物構成：固定家屋，家畜囲い，ポンプ小屋（井戸）

ホトの世帯数：1

世帯1の構成：N氏（40歳），妻（40歳），娘1（16歳），娘2（14歳）

来歴，牧地の分配，住居：

N氏は当地の出身だが，軍人となり，1980年に退役した後，東スニト旗南部のバヤンボルド＝ソムで党書記にまでなったという。だが，バヤンボルド＝ソムは沙漠地帯で水がないため，国からこの土地を貰ったという。1991年にこちらへ戻り，固定家屋（現在居住している部分の南半分），家畜囲い，機械式の井戸を作った。

牧地に関しては，84～5年頃に，一応分けることになったのだが，去年正式に分配した。彼の牧地16500ムーのうち，既に北側と西側の10000ムーを有刺鉄線で囲ったという。有刺鉄線は，6万元かかったとのこと。ただし，彼の所有していた「草牧場使用証」（1992年7月1日の日付あり），「草原所有証」（1992年7月1日の日付あり）によると，牧地の面積は14000ムーということになって

いる。また、彼の土地には現在、当ソム出身の他の世帯も居住しているが、来年には立ち退く予定とのこと。

土地は、30年このまま。全て分け与えたので、余分な土地はもうない。なお、彼の土地には、固定家屋近辺の井戸のほかに、現在他人が住んでいる東側の土地に機械式井戸があり、固定家屋南側の未だ囲っていない土地にも井戸があるという。N氏自身は、新たに結婚した世帯に分け与える土地がないため、牧地の不足を心配しているとのことであった。

N氏によると、近年はインフレがひどいため1000元も大した金額ではなく、家畜100頭くらいでは、他の仕事しなければ生活ができないとのこと。この点に関しては、事例3の世帯の人々も、N氏を尋ねてきた複数の客人も、同様の見解を示していた。

#### 家畜、放牧：

家畜数は、秋の売却後の状態で、小家畜が700頭程度。大家畜は、ラクダ3頭、ウマ40頭、ウシ140頭。全て私有家畜である。

ヒツジは、他人の世帯（ホニニイ＝アイル）に金を払って放牧させている。このホトの牧地にいる60～70頭（うちヒツジが20頭くらい、残りはヤギ）は、近々売るものらしい。N氏が言うには、「ホニニイ＝アイル」に頼む前は非常に忙しく、昼間に来客があっても誰もいないことが多かった。現在は、彼らのおかげで少し暇ができたという。

ウシは、去年は他の世帯に預けた。報酬は月400元。親しい友人（サイハン＝アハ＝ドゥー）の所なので、これでも安いほうだという。高いと700～800元というケースもあるらしい。N氏は、家畜頭数が多く牧地が不足している豊かな世帯が、広い牧地を持っているが家畜頭数は少ない貧しい世帯に自らの家畜を預ければ、前者にとっては牧地にかかる負担が減り、後者にとっては家畜預託の手数料で収入が得られるため、双方にとって利益があり、傭人を雇用するよりも合理的であると認識している。

この近辺では、1世帯＝1ホトが普通であるが、彼が書記をしていたバヤンボルド＝ソムでは、複数の世帯が一緒に住んでいるらしい。

このホトの家畜小屋は屋根が温室風のガラス張りになっている。これは近年改造したものであるが、暖かいので春の出産シーズンには効果があるという。また、固定家屋南側には55m×110mほどの長方形をした有刺鉄線の囲いがあり、飼料用の「ボルトール（豆の一種、漢語の黄豆つまり大豆か?）」を植えている。固定家屋近くの機械式井戸から、用水路として細い溝が掘ってある。この機械式井戸の近くには、ヒツジを洗う場所も掘ってある。また、来年からは、東の機械式井戸の近くでもボルトールを栽培する予定。N氏によると、ここは草生が良くないので、5～10年後には、飼い葉が必須になるだろう、とのこと。

筆者の観察する限り、ここは気候的にも他の調査地より乾燥しているため、草生はシリンホトや西ウジュムチンには及ばない。ただし、運転手のB氏が言うには、10年前には、草生は現在よりだいぶ良かったという。

調査中、旗中心地に住んでいる若いモンゴル族の家畜買付人が「集寧市」（ナンバーは蒙J＝ウランチャブ）と書いてある大型トラックでN氏のホトにやってきて、ウシを買い付けていった。売却価格はウシ16頭で2万元、支払いは現金であった。運転手のB氏によれば、秋にはこうした家畜の買付人が沢山やってくるとのこと。牧畜地域で買い集めた家畜を都市で転売するらしく、「車、運転手、家畜の相場を熟知している出資者、草原地域に知り合いのいる案内人」が一組になって仕事をする。また、N氏の妻と事例3のH氏との会話によると、仔ヤギは100元程度で売れるらしい。程度が良ければ160元程度になるとのことであった。

その他：

調査当日、固定家屋の裏では風力発電機のプロペラを修理していた。修理をしていたのは、このホトの東数キロの地点に住んでいる漢族の青年。彼はその後、家畜囲いのガラスも修理して、トラクターで帰っていった。

N氏は、四輪駆動車1台、バイク2台を所有する、現地でも裕福な階層に属する人物である。なお、N氏はここ数年間、家畜には騎乗していないという。いつもバイクで移動するとのこと。なお、今は、大きな道を行かないと有刺鉄線のせいで通行不能の個所が多々あるという。実際、このホトの南側も有刺鉄

線が道を横断しており，一応扉が付けられて通行可能にはなっているが，大型トラックが通行不能で引き返していった。

N氏の現在の関心事は電気。ソム中心地から引くと20万元必要だが，電気を引けば機械式井戸が常に回せるようになり，牧草の栽培面積が広げられる，とのことであった。N氏自身，牧草栽培の必要性を主張しており，近隣でも牧草栽培を目的として機械式井戸を造る世帯が増えているという。

### E. 事例5

調査地点：東スニト旗チャントシル＝ソム，バヤンノール＝ガチャ1組24号  
(事例4のホトから東に約25km)

ホトの建物構成：固定家屋×2，家畜囲い

ホトの世帯数：2

世帯1の構成：T氏(45歳)，妻，三男(20歳くらい?)，三男の婚約者

世帯2の構成：T氏の長男(26歳)，妻，娘(1歳1ヶ月)

来歴，牧地の分配，住居：

T氏は，ここのガチャで生まれた生粋の地元民。また，彼の妻もチャントシル＝ソムの人で，彼女の兄は事例4のN氏の妻の姉と結婚している。

ホトの有する土地は18000ムーで，北半分(固定家屋以北の1万ムーほど)を有刺鉄線で囲った。井戸は土地の中にあるという。土地利用においても，放牧においても，T氏と長男は全て共同である。

1989年にT氏が現在住んでいる煉瓦造りの固定家屋を建築した。それ以前はゲル住まいであり，2～3世帯で1つのホトを構成して移動生活を行っていた。1989年以前，隊に所属していた40ほどの世帯で固定家屋を所有していたのは1つか2つだけだったが，1989年以降，毎年10世帯程度が固定家屋を建て，現在ではゲル住まいは皆無である，とのことであった。

長男はT氏の固定家屋の東側に，レンガ造りだが円形でゲルのような外観を持つ固定家屋を建てて住んでいる。屋根が泥で，ゲル風に盛り上げてあり，レンガ造りの煙突もゲルの煙突を意識して造られている。土台はコンクリート

で固めてある。この円形家屋は去年建てたもので、住居表示はない。彼は3年前に結婚したが、以前はゲル住まいであった。

内部は壁面と天井に漆喰を塗ってあり、ゲル的な外観には反して天井は平らである。入口は鉄扉で、上部にガラスが嵌めてある。扉の両側にも採光用の小さなガラス窓があり、内部は明るい。入口を入れて右側の壁沿いに設けてある竈は鍋が二つ置ける構造になっており、固定家屋奥部はオンドルになっている。

長男によれば、ここで一冬越したが、寒くはなかったという。また、こうした形状の固定家屋はここ2年の間に出現したもので、隊にもう2～3棟ある。

家畜、放牧：

ホトの家畜は、小家畜が800頭、ウマ20頭あまり、ウシ30頭、ラクダ3頭。ラクダは、冬に乗って、ヒツジを放牧する際に使う。車の牽引については、今はトラクターを使うのでラクダは不要である。また、ウマも、ヒツジの放牧時に彼らが騎乗する。小家畜の構成は、筆者の観察する限り、ヤギが30%くらいを占める

上記家畜のうち、長男の所有分は小家畜200頭、ウマ10頭、ウシ10頭。このホトには、ホニチン等の雇用者はいない。父と息子二人で、十分労働力は足りているため。

今年は干ばつに見舞われている。雨の良い年なら30～40cmくらい草が生えるのに、今年は2回くらいしか降っていないので全くだめだとのこと。このホトでは例年、200～300頭くらいヒツジを売却しているが、今年は草が少ないので、300頭売る必要があるという。また、家畜囲いの中には干草が高々と積まれていたが、この総重量は2万斤（10トン）で、アバガ旗から購入してきたもの。これが一冬に使う量だという。

家畜買付人の買付価格は、仔ヒツジが2.6元/斤（キロ当たり5.2元）。仔ヤギも価格的には大差がない。家畜の値段は頭いくらではなく、斤いくらで相場が決まっているが、重量は牧民と買付人が適当に見当をつけ、厳密に計量するわけではない。なお、頭当たりの価格に換算すると、仔ヒツジは大型のもので100元/頭くらいになる。なお、買付価格は、都市へ向かうほど上昇し、旗中

心地まで出向けば2.8元／斤で取引されるとのこと。

井戸は4キロほど北、他人の土地との地境付近にある。南からも水は出るが、苦くて人も家畜も飲めない。なお、家畜用の水は、降雨があれば出現する池を利用する。井戸は機械式だが、地下100m位まで掘るため、7～8万元、場合によっては10万元かかるという。

隊の家畜は、1980年代には1万数千頭だったが、現在は7万頭までに増加したという。また、人口も、現在は400人くらいにまで増加している。

その他：

T氏の次男は未婚で、昨年シリングル盟の師範学校を卒業し、今年9月より東スニト旗デルゲルハン＝ソムで教師をしている。給料は月に300元少々とのこと。彼は音楽が好きで、10月1日（国慶節）には旗のコンテストに出場したらしい。そのため、国慶節の休みにはほとんど帰省できなかったという。

三男は、まだ結婚式は挙げていないが、既に婚約者と一緒にT氏の固定家屋の一室に住んでいる。同じ旗の人で、今年か来年には結婚式を挙げる予定らしい。T氏は、三男が結婚式を挙げるのにあわせて固定家屋を新築し、四輪駆動車を購入する予定とのことであった。

長男の妻はアバガ旗ツァガンノール＝ソムの出身。ここから直線で100キロの距離だが、実際には有刺鉄線をめぐって進むために、130キロ少々の行程であるとのこと。年に2～3回、長男の世帯全員で妻の実家を訪問するという。

長男の固定家屋へは風力発電で電気を供給しているが、T氏の固定家屋ではVCDやカラーテレビに給電するためにガソリン発電機を使用している。テレビを見るために衛星放送のパラボラアンテナを建てると、向きが「正しい」かどうかの「検査」に300元かかるとのことであった。パラボラアンテナは向きを変えると、モンゴル国などの放送も見られるためだという。

### 3. 考察

まず、牧地の分割・囲い込みや固定家屋への住環境の変化については、前回

の調査に引き続き今回の調査でも、地域を問わず一般的な傾向として普遍的に見られる、と言えるだろう。少なくとも、東スニトから西ウジュムチンに至る東西200km以上の領域で、上述の現象が着実に進行しているのである。もちろん、牧地の面積等に関しては地方的な偏差を見出すことは可能であるが、世帯の規模に応じて土地が分配され、資金に余裕がある者はこれを囲い込んでいく、というスタイルは共通している。

もとより、今回の調査も、草生は良好とされるシリングルで、しかも車でのアプローチが比較的簡単な地域で行われている。そこで得られる牧民生活のデータは、家畜の売却が簡単で現金収入が得られ、土地の条件も中程度以上であるため一定規模の家畜飼養が可能であり、また都市に住む漢族の建築作業員の調達も容易である、といった一連の好条件に恵まれた地域であるための特殊性を反映していることもまた事実であろう。実際、沙漠が多いチャハルや農耕化が進んで土地の少ないバーリンなどでは、生活が困難であるがゆえにシリングルの牧民の傭人となって移住していることは上記事例中の傭人の来歴からも明らかである。

より具体的な数値を挙げて、さらに詳細に検討してみよう。事例2のU氏や事例5のT氏の例から、中程度の牧民世帯でも、200～300頭のヒツジ・ヤギを年齢により1頭あたり100～300円で、また場合によってはウシを1頭あたり1000元以上で売却し、年収3～4万元を得ているとがわかる。無論、この数字は、必ずしも現地の平均値を示してはいない。『内蒙古統計年鑑』によれば、98年の東スニトの農牧民一人当たり平均純収入は3027元／年、シリングル市が3128元／年、西ウジュムチンが3793元／年である。統計上、総収入と純収入には約2倍の乖離があるが<sup>(8)</sup>、それを考慮に入れても、彼らは、平均以上の収入を得ている階層に属することがわかる（内蒙古自治区統計局 1999：196, 494-505）。

その一方で、傭人あるいは事例3のH氏やS氏などのような外来者が平均値を引き下げているであろうことは、傭人の月収が300元程度であり、またH氏やS氏の家畜保有頭数が少なく科学委員会の家畜を委託放牧している、と

いった類の調査データからも窺い知ることが可能である。そのため、インフォーマントたちは事実として、非外来つまり地元の牧民の中では「中程度」といえるのかもしれない。実際、彼ら自身、外来者と地元民の文化的な差異は、単に「モンゴル族」や「漢族」といった民族以外に、「スニト」「チャハル」などといった地域名称化したサブグループに即した形で日常的に認識していることは、前節の事例で取り上げた通りである。それゆえ地元の牧民の主観においては、外来者は比較対象から除外されており、自己認識と外来者も含んだ統計上の位置が一致していない、という可能性は否定できない。

ところで、こうした南部・東部地方とは別に、北の国境近くの交通の便が悪い地域も生活が厳しい、という話も今回の調査で耳にした<sup>(9)</sup>。ただし、こうした調査地以北の状況に関しては、調査地と同一の旗に属するため、手元の統計データからは窺い知ることができない。しかし、彼らが生活に困窮して南下し、傭人となった事例を見ておらず、インフォーマントからもそうした話を聞かないところから考えて、それは南部・東部的な「生活の困窮」というよりはむしろ、暖かい固定住居に住み、電化製品の利用や食生活の変化を経た人々から見ての「伝統的生活から連想される貧しさ」、言い換えればアクセスの不便さに起因する物質的な充足度の低さを表しているのではないかと想像される。少なくとも、前回の調査事例などから考えても、その質的な側面は検討の余地があるにせよ、牧畜の基盤となる牧地が面積的に足りないという事態は考えにくい。

さて、人々が季節移動をしなくなった現在のシリングルで、人々の移動といえば、貧しい地方から豊かな地方への労働力としての流入であることは、上述の議論から明らかである。かつて、この地域のモンゴル人の生業を表す一般的な用語であった「遊牧」は、松井が指摘するように、「遊」つまり移動と「牧」つまり牧畜という、「まったく二つの別次元の内容を持つ概念が合体されたもの」(松井 2000:11)であった。ただし、人々の季節移動が停止したとしても、モンゴル人の生業としての「牧」という要素は残り、人間とともに季節移動の主体であった家畜は一体どうなるのか、という問題が残る。論理的には、人間の移動と家畜の移動がリンクしなくてはいけない必然性はないのである。



事実、事例1、事例3、事例5に見られるように、自らの世帯に割り当てられた一塊の牧地を通年移動することなく、固定的な家畜囲いと牧地の間を往復するスタイルの牧畜が存在する一方、事例2のように牧地割当ての時点で冬営地が別に確保されており、傭人のみがそちらへ移動して放牧したり、あるいは事例4のように、牧地は一塊であるものの、他人の土地で放牧を委託することにより、割当てよりも広範囲の牧地を利用可能として畜群の移動可能範囲を拡大している事例も見られる。もとより、牧民が住居の季節移動を行っていた際に、どの程度の移動範囲をどの程度の規則性を持って移動していたか、を調査しなければ確たることは言えないが、少なくともシリングルに関する限り、牧民の住居が固定家屋化することが即ち畜群の移動性低下につながると無条件に想定することは、国境を隔てて隣接するモンゴル国における移動の実態から類推すれば蓋然性は高いものの<sup>(10)</sup>、やや短絡的ではないだろうか。

一方、売却に伴う家畜のコンスタントな域外搬出は、家畜構成比に少なからぬ影響を与えていると思われる。事例1のJ氏の言葉にもあるように「仔ヒツジ、オス、老畜」を大量に売却するため、事例3のS氏のごとく、オスの成畜はほとんど存在せず、メスと仔によって成り立つ家畜構成となる。つまり、去勢オスとしてストックするよりも、早期売却によってメスの比率を上げ、仔畜の生産性を高めよう、という戦略である。これは、買い手は常に存在するという市場状況と、牧地が制限されているため家畜の数を無制限に増加させられないという状況への牧民側の対応であると解釈できよう。また、家畜の種類に関しては、モンゴル国ではしばしば見られる「ウマ好き」(尾崎 1999: 68-69)、つまり馬群の拡大に全精力を注ぐ人物が存在しない。それどころか、東スニトの事例4、事例5を除けば、ウマの所有はほとんどゼロに近い状況である。これは、ウマが「威信財」として理解されているモンゴル国の状況に対し(尾崎 2000b: 7)、牧民がウマを日常的に使用しなくなり、生体の売却で利益の上がるヒツジ・ウシや、生体に加え毛の売却でも利益の上がるヤギ<sup>(11)</sup>の如き貨幣的な価値を付与されていない現状を反映したものであろう。即ち、シリングルの牧民は畜群構成において、より収益性の高い家畜に特化しているのである。

さて、このような牧地利用、家畜飼養パターンの現状において、牧民たちは、牧地の荒廃を指摘するのである。そして、その対策が、事例2のU氏のような牧地の草を保護するための有刺鉄線の設置、そして事例4のN氏のような機械式井戸を稼動しての牧草栽培なのである。つまり、このままの状況では長続きしない、という現状認識が存在する。

ところで、ハンフリーとスニースは、南北モンゴル・ブリヤート・トゥバにおける比較研究の結果、牧地荒廃の原因は面積当たり家畜頭数の増加、大家畜に比較した小家畜の比率の増大なども可能性として考えられるが、その最大の原因は移動性の低下である、と主張している。その根拠は、南北モンゴルの家畜密度がほぼ大差ないにもかかわらず、劣化したと考えられている草原の比率は圧倒的に南モンゴルのほうが大きく、また、現在も移動生活を行っている北モンゴルとトゥバでは牧地荒廃が認識されず、農耕化と定住化の進んでいる南モンゴルとブリヤートでは牧地荒廃の認識率が高い、という彼らの調査結果である (Humphery & Sneath 1999: 42-54)。そして、ブリヤートにおいては、牧地荒廃は疑いようのない事実であると、ロシア=モンゴル国境付近を写した衛星写真を示しつつ論証するのである (Humphery & Sneath 1999: 11-14)。

ただし、この論断には問題点が含まれていることも事実である。まず第一に、彼ら家畜数を、SSU (Standard Stocking Unit) という単位を用いて比較しているが、これはヒツジを1、ヤギを0.9、ウシを5、ウマを6、ラクダを7という換算率で、全てをヒツジ換算に変換した場合の頭数を示している (Humphery & Sneath 1999: 42, 309)。こうした単位はモンゴル国などで公式に用いられているものであるが、ウマなどの大型家畜比率が低い南モンゴルでは、総体的に低めの数字が出ることは明らかである一方で、ウマの食草量がヒツジの6倍であることを保証するものではない。つまり、SSUで算出された家畜密度と牧地への負荷に、どの程度の相関性があるか、疑問の余地がある。

また、「牧地荒廃の認識率」は牧民への聞き取りに依拠した数字であり、何らかの客観的な指標に依拠した「牧地荒廃」を示すものではない。当の牧民は一般的に、一年中同じ場所で放牧することや、体力が弱く移動の遅い外来種を

導入したことが牧地荒廃の原因であると認識しているという (Humphery & Sneath 1999: 48)。そうであるならば、季節移動を行わない地域で牧地荒廃の認識率が高いのは、インフォーマントの文化的背景からの当然の結果であり、移動性の低下が草原の劣化を引き起こすという結論はトートロジーでしかない。

ただし、その原因は何であれ、シリングルの牧民自身も草原の劣化を認識していることは筆者の調査からも窺い知れることである。そして、牧民自身、その状況を座視しているわけではないが、仮に彼らが移動生活こそが牧地荒廃への究極的な対応策であると考えていたとしても、それは実際的には内的・外的要因により困難であろう。というのも、彼ら自身、固定家屋の安楽さは認めているわけであるし、第一、国家という枠組みが、かつてのような一定の行政単位内における比較的自由的な移動生活を認めないだろうからである。そこで彼らは、より現実的かつ相応の対応として、上述のような行動を起こすのである。

草原の囲い込みは、牧地荒廃の原因が他人の家畜、もしくは自動車の無秩序な侵入にあるならば、一定の効果をあげるだろう。ただし、家畜密度の過多や移動性の低下が真の牧地荒廃の原因であるならば、これは単なる気休めに過ぎないだろう。これに対応するには、土地の生産力を上げる、という全く新しい発想を導入するか、かつての移動性を、少なくとも家畜に関する限り回復するしかないわけである。そして、事例4におけるN氏の対応が、この両者に適合する。彼は、小規模ではあるが牧草を栽培すると同時に、家畜密度の低い土地へ自らの畜群を移動させることによって家畜の移動性を回復させ、家畜と土地の関係の最適化を図り、極力牧地荒廃を避けようとしているといえるだろう。

ただし、ここで問題となるのは貧富の差である。N氏のような豊かな人々は、家畜の移動性を回復させるため、他人の土地に対して払う金銭を用意することができる。ところが、貧しい人々は、金銭を払ってまで他人の土地を利用できない。もちろん、貧しい人々は飼養している家畜も少ない、という状況下では問題は起きないのであるが、今後新たに牧地の分配が行えない状況が続けば、家畜は決して少なくないのだが、世帯規模が大きすぎるために貧しい、というケースが出現することは想像に難くないし、N氏もそうした状況を危惧してい

る。こうなると、N氏が志向している最適化システムは破綻するのである。つまり、貧者は、貧しさから抜け出すために自らの牧地を酷使し、その結果牧地がより荒廃する、という悪循環に陥ることになる。だが、こうなった場合、貧者が傭人化しても牧畜を継続できるか否かは、多分にシリングルという地域で人口・牧地・家畜が一定の均衡を保っているかによるのだろうと思われる。

最後に、本論のまとめと今後の研究の展望を示したい。本論では、筆者の現地調査データに基づき、現在のシリングルにおける牧民の居住と生業の現状を検討した。その結果、明らかになったことは、牧地の分割と固定家屋化という生活スタイルの変化の中で経済的な繁栄を享受している現地の牧民の現状であり、また彼らの豊かな生活を支えている流通システムおよび貧困地域からの流入者の存在である。一方、牧民は季節移動の消滅に起因すると思われる牧地の荒廃に対し、現在の生活レベルの維持を前提としつつ可能な対策を講じている。例えばその中に、他人の土地で放牧を委託することによって畜群の移動性を確保する、より「土地」に重きを置いた「新しい種類の家畜預託」<sup>(12)</sup>とでも呼ぶべき現象がある。このように、現在の内的・外的条件に即して新たな生業システムを構築しつつあるのが、シリングルの牧畜社会の現状であるといえよう。

だが、問題は、果たしてこの新しい生業システムが持続可能なものなのか、という点である。言い換えれば、シリングルの牧民は今後もこのまま牧畜を続けられるのか、あるいは遠からぬ将来に破綻するのか、というシステムの安定性に関わる疑問である。これを明らかにするためには、恐らく、従来の文化人類学的なアプローチに加え、例えば生態学などの自然科学的なアプローチも必要になってくるとと思われる。こうした新たな視点の模索と導入が、今後の課題である。

本論は、平成11年度笹川研究助成による研究「南北モンゴルの近代化プロセスに関する比較研究—ダリガンガおよび北部シリングルの事例—」（研究代表者：尾崎孝宏）の成果の一部をなすものである。

## ◆ 註

- (1) 今回の現地調査は、1999年9月25日～10月6日の間、シリングル盟に属する西ウジウムチン旗（3ホト）、シリングル市（1ホト）、東スニト旗（3ホト）で聞き取り調査を行った。ただし、西ウジウムチン旗での新規2ホトでの調査は、偶然遭遇した結婚式が主たる調査となり、牧畜に関しては簡単なデータしか得ていないため、本論では調査データの提示を割愛した。西ウジウムチン旗の結婚式に関する調査報告は、別稿にて行いたい。なお、調査地の選定は、今回運転手を担当してくれたB氏の直接の知り合いであった西ウジウムチンの調査ホトの他は、B氏の知り合いである現地幹部の斡旋によった。
- (2) ウィリアムズによれば、本来、牧地の分配は各世帯の責任による牧地の保護も意図されていたが、結果はそうした中国政府の意図には反してしまっているという（Williams 1996：307-309）。
- (3) 前回の調査報告では、牧地分配の面積は、一人当たり180ムーとインフォーマントが述べていたのでそのまま記したが（尾崎 2000a：57）、他事例と比較してあまりに少ないため、今回の調査で再びインフォーマントに問いただしたところ、1800ムーであるとの回答を得た。そのため、この場を借りて訂正させて頂きたい。
- (4) アラシャンボラグ＝ソムについては、高明潔が1990年代前半の調査に基づく論文を発表しているが、そこでは牧民は、冬営地には固定家屋があるが、夏はホトアイルを形成し、ゲルで移動生活を行っていると報告している（高 1996：304, 321-322）。本論の報告例では夏営地に固定家屋が建設され、高の一般化とは矛盾しているが、この理由としては、調査ホトに関しては夏営地がソム中心地に近く便利である、という点が考えられる。なお、分配された土地は5人分と想像できるが、5人目が誰であるのかは確認していない。
- (5) 調査者の観察では、このゲルは現地としてはかなり大きなサイズで、モンゴル国で一般的な5ハナのゲルに匹敵する大きさであったが、柱（バガナ）のない内モンゴル式である。カマド（ゾーホ）はレンガと泥で作ってある。内部は、地面が剥き出しの部分と、コの字形に、ベッド風の床が作ってある構造となっている。また、入り口の両側にガラス窓がはまっているが、ハルハ式とは違い、天井（トーン）にはガラスは入っていない。
- (6) B氏は元々、シリングル盟旅遊局に所属する運転手であるが、ここ4年ほどは個人でタクシーの運転手や、牧民からヒツジを買い付け、天津までトラックで運搬して転売する仕事に従事している。アラシャンボラグ＝ソムは、彼の家畜買い付け地の一つである。
- (7) 本論では、一般的にイニシャルで示してある人物が主たるインフォーマントであるが、S氏に関してはほとんど会話をしていない。
- (8) これは、1998年の内モンゴル自治区における牧民の一人当たり総収入が4842元であるのに対し、経費や税金などを差し引いた純収入が2515元であることから敷衍

- した数字である（内蒙古自治区統計局 1999：196）。
- (9) 事例3のH氏宅で、H氏の妻の母とB氏との会話に、東スニト旗北部、モンゴル国との国境近くのホンゴル＝ソム、ダライ＝ソムでは生活が厳しく、学校も小学校までしかない、という話題が出た。ただし、話者がチャハルとシリン浩特市の出身者であるという点は考慮に値すると思われる。
- (10) 例えば、事例1のJ氏と父親の世帯に分配された10800ムーは7.236平方キロであり、大体、3km×2.4kmの長方形に相当する。一方、筆者が現地調査経験のあるモンゴル国スフバートル県オンゴン＝ソムは、東スニト旗ホンゴル＝ソム、ダライ＝ソムと隣接する地域であるが、ここでは小家畜200頭程度のケース（2世帯のホットアイル）で6km、小家畜1400頭のケース（4世帯のホットアイル）で10数kmが最小の年間移動距離である（尾崎 1999：66, 70）。J氏と父親の世帯の合計小家畜数は1000頭であるから（尾崎 2000a：56, 58）、草地の質を問わなければ、牧地分配後のシリングルにおける利用可能な牧地の面積が相対的に決して広くないことは否定しがたい。
- (11) 事例1のJ氏によれば、ヤギから採れるカシミアの価格は、西ウジュムチンでは180元/斤（キロあたり360元）だが、200頭のヤギから40斤程度しか採れないとのことである。そのため、例年数100頭のヒツジを売却する階層の牧民にとっては主たる収入とは言えないが、事例3のH氏のような比較的貧しい層にとっては家畜の数を減らさずに済むため、より貴重な収入源となっていることが想像される。
- (12) 社会主義化以前の家畜預託に関しては、利光（＝小長谷）の議論を参照されたい（利光 1986）。

#### ◆ 参考文献

Humphery, Caroline & Sneath, David

1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*.  
Duke University Press.

高明 潔 1996 「内蒙古遊牧地域における妻方居住婚—双系制社会の一面」『民族学研究』60(4)：295-329。

松井 健 2001 『遊牧という文化』吉川弘文館。

内蒙古自治区統計局

1999 『内蒙古統計年鑑 1999』中国統計出版社。

尾崎孝宏 1999 「『現代モンゴル牧民社会の基層的単位に関する研究—スフバートル県オンゴン郡の事例』調査報告」『日本モンゴル学会紀要』29：61-79。

2000a 「牧地の分割と定住化—南モンゴル、シリングル盟の事例」『鹿大史学』47：45-66。

2000b 「編訳者まえがき」J.サロールボヤン（著）・尾崎孝宏（編訳）『セツェン＝ハンの駿馬』礼文出版、5-9ページ。

利光 (=小長谷) 有紀

1986 「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』69(5) : 140-164。

Williams, Dee Mack

1996 “Grassland Enclosures: Catalyst of Land Degradation in Inner Mongolia.”  
*Human Organization* 55(3) : 307-313.